

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No. 26

編集 1993.1.30
発行 佐賀県立九州陶磁文化館
代表者 田中耕作
〒844 佐賀県西松浦郡有
田町中部乙3100-1
電話 0955-43-3681
印刷所 山口印刷株式会社
佐賀県伊万里市二里町大
里乙3617-5



えがらつ そうもんかたくち
絵唐津草文片口

館蔵資料

肥前・唐津焼・市ノ瀬高麗神窯
16世紀末～17世紀初頭
口径18.7cm 高さ9.8cm 底径7.2cm

絵唐津の片口で、のちに茶人の見立てにより水
指として伝えられた。下膨らのゆったりとした胴
で、口縁をわずかに外反りにし、注口を付ける。
胎土はやや荒い茶褐色土を用い、高台際まで釉掛
けする。胴の一方に唐草風の草文を、他方には華
文を大胆で闊達な筆致で描く。松浦古唐津系・市
ノ瀬高麗神窯の作とされる。

平成4年度特別企画

現代イタリア陶芸展

1950~1990

現代イタリア陶芸展は、陶磁器専門の博物館として世界的に有名なファエンツァ国際陶芸博物館の所蔵作品を中心とした展覧会で、平成4年8月29日から10月4日まで第1・第2・第3展示室で開催されました。

出品作品は、1950年代以降のファエンツァ国際陶芸コンクールの受賞作を中心にまとめられましたが、1950年代以前のアルビゾラの芸術運動の中から生まれてきたT.マッツォティやL.フォンタナらの作品をはじめとして、日本でもよく知られたニーノ・カルツの「セジェスタへの捧げもの」(1988年)と題されたモニュメンタルな大作や、フランチェスコ・リゴンの「生命の木」(1991年)やロランド・ジョヴァンニニのネオン管を使用した「青いゴデティアの花瓶」(1991年)といった最近の作品も含まれ、86名の作家の117点が展示されました。

開会式に先立って8月28日の夜、歓迎レセプションが開かれ、イタリア側から、今回の展覧会の監修者でファエンツァ国際陶芸博物館長のJ.C.ボヤーニ氏やファエンツァ市を代表して、ファエンツァ週間財団事務局長のA.ゲッティ氏、ファエンツァ国立陶芸大学教授で陶芸家のA.ロンティーニ氏とその夫人らが出席し、また東京のイタリア文化会館長のJ.デマルキス氏、日本側の監修者で京都大学名誉教授の乾由明氏、国際陶芸アカデミー日本事務局長・谷岡知子氏、佐賀県側から井本勇・佐賀県知事をはじめ、堤清行・県教育長、川口武彦・有田町長など関係者が多数出席し、歓談のひとときをすごしました。

・記念催事

現代イタリア陶芸展の期間中、いろいろな催し物が開催されました。

○記念講演会

9月2日にはアルド・ロンティーニ氏により「イタリアの現代陶芸」というテーマで講演していただきました。ファエンツァ在住の日本人陶芸家・平井智氏の通訳により、スライドをまじえて2時間、講演され、参加者は熱心に話に聞き入っていました。

○イタリア料理と器の出会い

9月8日には「イタリア料理と器の出会い」として

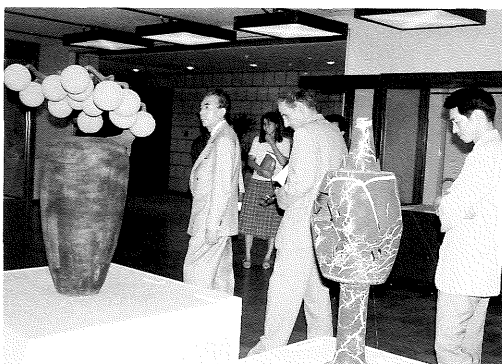
福岡の料理家・原島正雄氏によるパスタやラザニアなどのイタリア料理を、有田町や伊万里市の窯元から提供された有田焼の器に盛り、参加費500円で一般の方々に提供されました。

○イタリア音楽ミニ・コンサート

9月27日には、ステファノ・ロッチ氏のアコーディオン演奏、ドリアーノ・スリス氏のギター伴奏によるイタリア音楽ミニ・コンサートも開催されました。



歓迎レセプション。右からA.ゲッティ氏、J.C.ボヤーニ氏、A.ロンティーニ氏夫妻、J.デマルキス氏そして通訳をいただいた平井智氏



F.リゴンの作品を見る乾由明先生と、I.A.C.会長シュニーダー氏。



イタリア料理と器の出会い

平成4年度特別企画

福岡の陶磁展

10月10日(土)～11月15日(日)まで第1・第2・第3展示室において福岡の陶磁展が開催されました。

当館では九州各地のやきものの歴史とその特質をシリーズで紹介しておりますが、今回は「福岡の陶磁」をとりあげました。

福岡の陶磁というと、上野焼、高取焼の名がまず挙げられるが、それ以外にも田香焼、小石原焼、須恵焼、野間焼、宗七焼、能古焼、秋月焼、柳原焼、東野亭焼、赤坂焼、朝妻焼、朝田焼(一の瀬焼)、今村焼、釈形焼、星野焼、坂東寺焼、蒲池焼、鹿子生焼、男の子焼、二川焼、黒崎焼など数多く知られている。豊前上野焼、筑前高取焼は「遠州好み七窯」に数えられ、特に「遠州高取」の名は茶人の間にもよく知られているが、それ以外の福岡の陶磁は、民陶としての小石原焼や筑前の磁器窯である須恵焼などがわずかに知られている程度で、筑後の陶磁にいたってはほとんど知られていないのが現状である。本展では、上野焼、高取焼をはじめとして、あまり知られていなかった他の焼物を含め、近世において福岡で焼かれた陶磁器を一堂に展示し、その歴史や特質を体系的に、網羅的に紹介することを目的としている。現在の福岡県は古くは豊前国、筑前国、筑後国にわたる地域で、旧藩名でいえば主な藩だけでも小倉藩、福岡藩、直方藩、秋月藩、久留米藩、柳川藩、三池藩にあたる。そもそも九州の陶磁器生産に大きな進展をもたらしたのは、豊臣秀吉による文禄・慶長の役であり、朝鮮半島に出兵した諸大名が朝鮮陶工を連れ帰り、多くの窯場が開かれた。その後、陶磁器生産は諸藩の殖産策とも相まって、各地に国焼を形成していった。福岡の陶磁の多様な状況もこの様な経過によって生まれてきたといえよう。

本展では、福岡の陶磁に関して伝世品の資料調査を行うとともに、消費地遺跡および古窯跡の出土遺物の調査を行った。これは近年、陶磁研究において考古学的手法やその成果の活用が重要となってきたことによるもので、福岡の陶磁においても、特に高取焼の緒窯で発掘調査が進み、新たな資料が数多く提示されたことによる。そして伝世品の資料調査の際に、紀年銘資料などとともに、出土陶片との比較・照合を進め、そ

れらのデータをもとに出品作品の選定、展示をすすめた。今回の展示は福岡の陶磁の伝世品 274点を豊前、筑前、筑後の地域に分けて、各窯ごとにほぼ時代順に展示し、また窯跡および消費地遺跡出土の陶片を多数紹介、展示した。

記念催事

○福岡の陶磁展 協賛茶会

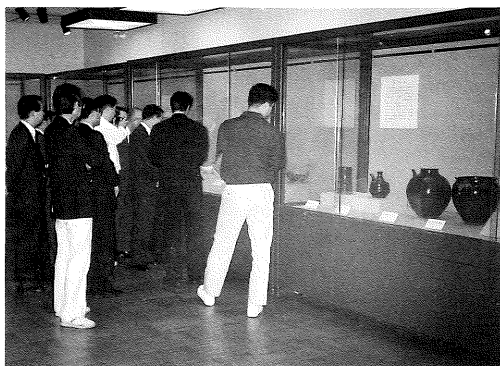
平成4年10月25日に佐賀県茶道連合会の協力により協賛茶会を開催しました。第1展示室の茶室において表千家同門会、研修室において裏千家淡交会の二席が設けられ、展示室で作品を鑑賞するとともにお茶を楽しみました。

○福岡の陶磁展 列品解説

平成4年10月25日に陶芸家・日本工芸会正会員の亀井味楽先生による列品解説が行われました。講堂で約1時間、福岡の陶磁について講演され、その後、展示作品の解説をされ、興味深い話が聞かれました。



テープカット風景



展示室風景

行事・展覧会報告

国際陶磁展

4月29日から5月10日まで、第1展示室において国際陶磁展が開催されました。この展覧会は有田町・西有田町広域行政調査会の主催で「国際陶磁器交流フェスタ in 有田 '92」の一環として行われたもので、有田町と有田との関係の深い中国・景德鎮市、韓国そしてドイツ・マイセン市との交流を図ることを目的としている。日本（有田陶芸協会作品）、中国（景德鎮窯製品）、韓国（陶芸協会作品）、ドイツ（マイセン窯製品）の4カ国の現代陶芸作品約80点が展示されました。

また、5月6日には国際陶磁器交流サミットが開かれ、有田町長・川口武彦氏、中国・景德鎮市副市長・柯爾榮氏、韓国・陶磁器文化振興協会長・金基衡氏、ドイツ・マイセン製陶所社長・バルター氏らが出席して、活発な意見交換が行われました。

博物館実習

平成4年度の学芸員実習は7月20日から8月8日まで行われました。受講生は佐賀大学の立井匡樹さん、山口貴代さん、松村加奈さん、福田洋子さん、西南学院大学の山口由美子さん、薬師寺圭子さん、力武直美さん、後藤敦子さん、九州産業大学の池田美子さん、有田窯業大学校の永吉琢也さん、原久さん、弓田宏子さんの12名でした。



館職員との懇談会

7月20日の開講式の後、館内施設見学にはじまり、陶磁概論や飾付実習、陶磁資料取扱実習、写真実習、陶片整理などのカリキュラムを履修し、また陶芸実習では実際にロクロを使って陶器作りに挑戦し、思い通りの作品を作りました。そして、全員、無事に3週間の実習を終えました。

第21期・第22期陶芸教室

第21期陶芸教室（平成4年6月6日～8月8日・講師は大宅利秋先生）、第22期陶芸教室（8月22日～10月24日・講師は橋口誠先生）が開講されました。

講師の先生の指導により、手びねりや板づくり、ロクロ成形などから窯詰め、焼成と焼物作りのひととおりを体験しました。

受講者は第21期、第22期とも24名で、20才の看護学生から、最年長は76才の会社社長の方で、年令も職業もまちまちですが、和気あいあいとした雰囲気で作陶にいそしみ、おのおの会心作を仕上げました。



第21期の皆さん。



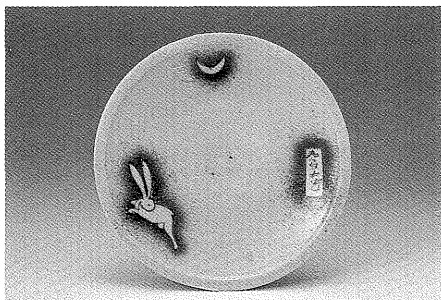
第22期の皆さん。

シリーズ

やきものに見る文様 (22)

げつ と
月 兎 文 様

月面のクレーターがかたちづくる陰影に、兎の形を見い出したのは日本人だけではなく、南アフリカ・ヨーロッパ・インド・チベット・モンゴル・北アメリカ先住民の間に広く伝わっている。中国でも紀元前3世紀の『楚辞』天問編に月中の兎のことが歌われ、また湖南省で発見された紀元前2世紀の馬王堆1・3号漢墓出土の、絹布に絵を描いた「帛画」に、月中に兎と蟾蜍(ひきがえる)の図案が描かれている。蟾蜍については紀元前2世紀末の『淮南子』覽冥訓に、弓の名手・羿が西王母という女神からもらった不老不死の薬を、その妻・姮娥が盗んで月へ逃げたという話があり、『後漢書』には月で姮娥が蟾蜍に変身したとある。宋代の『後山叢談』は、地上の兎はすべて雌で、月の兎は逆に雄ばかりだから、地上の雌兎は月光をあびて妊娠するという俗説を収録している。また古い中国の習俗では、陰暦8月15日(日本の十五夜、中国では中秋節)の際、「兎兎爺」と呼ばれる兎の顔をした粘土製の武人像を飾るという。日本では餅をつく兎のイメージがあるが、中国ではもともと杵臼で不老不死の薬をついていた。月の満ちては欠け、欠けては満ちる様子が、不老不死・再生の思想と結びつけられたのであろう。日本の『竹取物語』でも、月へ帰るかぐや姫が、老翁老婆に不老不死の薬を残していく。このように月や兎は不老不死・再生の吉祥文様として中国で愛好され、陶磁器の意匠にも多く採用された。写真は初期伊万里の染付吹墨月兎文皿で、上の方に三日月が、左下に兎がそれぞれ吹墨技法で描かれ、右下の文字は「春白□兎」と読める。(渡辺芳郎)



染付吹墨月兎文皿

有田 1630~40年代(柴田夫妻コレクション)

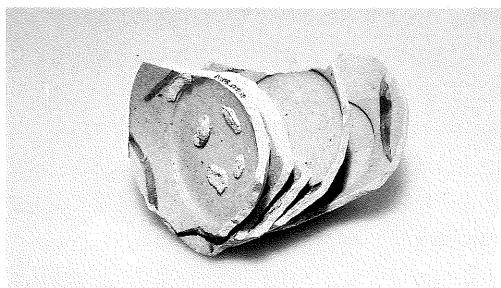
シリーズ

やきものの技法 (23)

かさ づ
重ね積み① 目積み

陶磁器をより多く生産するために工夫された窯積み法の一つである。重ねた状態のまま焼成される。今日の焼成法は、窯の中に耐火材で棚を組み立てたり、製品を入れた匣鉢(容器)を重ねることにより、窯内の空間利用が無駄なく行われる。こうした技術がない時代は、ものを重ねることにより窯内を効率的に利用した。

釉薬のかけられた陶磁器は、表面がガラス状のものでおわれているため、焼成中に他のものとふれていると冷却したときに熔着してしまう。皿を重ねると、下の皿の見込みに上の皿の高台が乗るため、そのまま焼けば熔着してはずれない。よって接着面をなるべく少なくするため、小さな粘土の塊などを高台と見込みの間に並べて焼成する。この方法を目積みという。焼き上がってから軽く叩いてはずすと、皿の見込みに数個の傷跡が残る。これを目跡と呼んでいる。



小溝上窯(西有田町)出土 1600~20年代

目積みは16世紀末から17世紀初頭の唐津焼の皿類に多く見られる。直径12センチぐらいの皿であれば、10枚ぐらいは重ねて焼かれている。目の種類は皿の素地と同じ土を用いた胎土目と、耐火性のある砂まじりの土を用いた砂目に大別される。唐津焼の変遷においては、胎土目の技法が砂目よりも先行する傾向がある。また磁器の創始期(1610~20年代)のものには砂目積みの技法が用いられているが、その後は用いられなくなる。

胎土目や砂目の他には、貝目がある。貝は2センチほどの小さなものが用いられ、淡水のしじみ貝や海の貝が使われている。貝目は皿の重ね積みの他に、壺や甕の焼成にも使われた。(鈴田由紀夫)

〈概 報〉

鹿島市浜町皿山窯跡の調査

当館では、平成4年度の肥前地区古窯跡調査として、鹿島市浜町に所在する浜町皿山窯跡の発掘調査を、平成4年6月1日～10日にかけて実施した。

浜町皿山窯跡は、鍋島藩の支藩・鹿島藩領に属する窯場で、『鹿島藩日記』『皿山代官旧記覚書』などに記載がある。享保3年(1718)もしくは6年(1721)に開窯したが、一時期中断し、安永4年(1775)に復興したと伝えられ、昭和16年(1921)まで操業した。

窯跡は丘陵の西斜面上に立地し、斜面東側上方をⅠ区、斜面下端の小道を挟んで急傾斜で落ちた下方の平地をⅡ区とし、Ⅰ区に5ヶ所、Ⅱ区に1ヶ所のトレンチを設定した。その結果、東西方向の窯体のうち5つの焼成室を確認した。うち1室の規模が確認され、奥行3.08m、幅5.76m(内法)を測る。窯壁の残存位置から焼成室は上方へ行くほど拡大していたようである。窯尻はⅠ区上方の雑木林の下と推測され、確認できなかった。また胴木間もⅡ区の平地造成のさい、完全に削平・破壊されたようである。窯体はトンバリ構築であるが、その大半は抜き取られている。抜き取りは徹底しており、新しい窯に再利用するため廃窯時に抜き取られたと推測される。このほか砂床・火床・火床境が検出された。焼成室内部の攪乱坑の壁面観察から、検出床面の下にもう1枚焼土面を確認し、窯体は最低1回改修されている。また窯体南側で焚き口ならびに製品の出し入れ口と思われる固くしまった作業場の遺構と、木柱基部を残す柱穴が検出された。その南側では、窯構築もしくは改修時と推定される整地層と、掘り込みが確認された。なお、物原は発見できなかった。

遺物では、18世紀後半のものがⅡ区から少量出土し、窯体周辺からは型紙摺りの染付碗・小皿の出土が多いことから、江戸時代後半から明治時代にかけて窯が操業されたと推定される。窯道具は大小のトチン・ハマがあるが、匣鉢はほとんど出土しておらず、日用品の生産が中心だったと推測される。また大型ハマや足付ハマの一部には、「惣」字や「干」「分」など屋号とおぼしき記号が陰刻・陽刻されたものがある。

(渡辺芳郎)



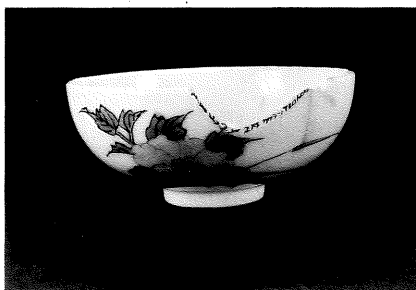
Ⅰ区Bトレンチ全景



Ⅰ区Bトレンチ中央部およびCトレンチ全景



染付型紙摺皿(Ⅰ区Aトレンチ出土)



釉下彩小碗(Ⅱ区出土)

利用案内

開 館	午前9時～午後4時30分 月曜休館 年末年始(12月28日～1月4日)休館
観覧料	一般200円(150円)／大学生150円(100円) 小・中・高校生は無料。 ()内は20人以上の団体料金。但し、特別企画展の場合は、その都度に定めます。
交 通	佐世保線有田駅下車徒歩10分